

東京未来ビジョン懇談会（第6回）

平成29年11月27日（月）

—議事概要—

東京未来ビジョン懇談会（第6回）

平成29年11月27日

【岩瀬次長】 それでは、定刻になりましたので、ただいまより第6回「東京未来ビジョン懇談会」を開会いたします。本日の進行役を務めさせていただきます政策企画局次長の岩瀬でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

初めに、会議の公開についてご説明いたします。

本日の会議の様子は、東京都のホームページ上でインターネット中継により配信されております。

報道機関の皆様は、懇談会の冒頭から終了まで取材が可能です。

また、本日の会議資料、議事概要、中継映像につきましてはホームページ上に公開して参ります。

なお、本日の次第及び会議資料はタブレット内に入っております。タブレット内の資料は自動的に説明時に動くようになっております。

それでは、開会に当たりまして、小池知事よりご挨拶をいただきます。知事、よろしくお願い申し上げます。

【小池知事】 皆さん、こんにちは。座ったままで失礼します。今日も新宿、都庁までようこそおいでくださいました。ありがとうございます。

先日、シンガポールに行きました。人口は550万、そして多様性に富んでいる典型的な所であり、それを力にしている、国の力に活用しているということと、それから、何て言うんでしょうかね、スピード感あふれる、そして戦略的な政策をばんばん進めていくということで、例えば、金融などはこれまで東京がずっとアジアのセンターであったのが、いつの間にかシンガポールの方にひゅーっととられてしまうとか、そういった形で非常に先進的な国であり、小さいけれども、存在感を示している。

そこで見えてきたのが、例えば、フィンテック、金融とテクノロジーを一緒に合わせたもので、これについての進歩というのも大変スピード感あふれるものがあります。それから、世界はA I（人工知能）などによって産業も社会も大きく変わろうとしています。こちらでも大変スピード感があります。

そういう中で、皆さん、今日でもう6回目になるんですけれども、「東京未来ビジョン懇

談会」、これからの時代の変化というのは大変なスピードで、ますますそれが加速していくであろうと。ですから、今日のことを考えて、そして明日のことを考えていると、もう間に合わないかもしれない。だからこそ、未来にこれからも活躍していく皆様方が、大胆な日本の未来、東京の未来を考えていただくということで。いつの間にかちゃんとネットワークも出来るようになったと聞いております。

6回目の今日は、お二人ですね、三宅島で漁師をやっておられる西田さん、それから、檜原村できこりをやっておられる東京チェンソーズの青木さんと、このお二人が大自然の中で色々活動そのものをしていらっしゃるので、これからそういう一番ベースになる漁業であるとか林業であるとか、一番古い部分ではあるけれども、将来的にどうあるべきなのか、お二人に話していただきたいと思っております。

今日もすばらしい懇談会にしたいと思っておりますので、どうぞ最後までご協力よろしくお願ひいたします。できるだけ、こんなことあり得ないだろうというぐらいの発想の、何て言うんですか、何段飛びかぐらいのことを皆さんには私はむしろ期待をしたいと思っております。よろしくお願ひします。

【岩瀬次長】 知事、ありがとうございます。

本日の懇談会では、今、知事からお話ございましたように、まず青木様、そして西田様のお二方にプレゼンテーションをしていただきます。その後、東京の未来や東京の可能性などにつきまして、メンバーの皆様全員での意見交換を行い、おおむね18時頃の終了を予定してございます。

なお、モハメド・オマル・アブディン様におかれましては、遅れてのご参加となります。よろしくお願ひいたします。

それでは、ここからの進行は知事にお願ひいたします。

【小池知事】 はい、ありがとうございます。それでは早速、参りましょう。

まず、じゃ、青木さん、早速お願ひいたします。よろしく。

【青木亮輔様】 それでは、これから、今日は「東京の自然」ということについてテーマをいただいておりますので、林業というより、自然というところでもう少し広いところでお話できればなというふうに思っております。タイトルとしては「2050年 世界に誇る自然共生都市『東京』」ということでお話をさせていただきます。

まず、自然というふうに聞いて、どういったものを思い浮かべるかなと思うんですが、僕なんかは空気がきれいとか、自然の恵み、おいしい物が食べれるんじゃないのかなとか、

そういうプラスのことを考えたりするんですが、中には最近、虫がいるとか、ちょっと怖いとか危ないんじゃないかというような、ちょっとマイナスで捉えるような方も結構多いと思います。それに対して、例えば自然の脅威なんていう、怖いとかのレベルではなくて、人間に対してすごく牙をむく、そういったところもあるというのが自然の一面かなというふうに思います。そういった中で、今回は、僕は山と川、そういったものに絞ってちょっとお話をさせてもらえればなというふうに思っています。

そもそも東京の山、山と言うと森林ですよ、どのくらいあるのかなというところをちょっとお話しすると、8万ヘクタール。ぴんと来ないですよ。日本全体で2,500万ヘクタールありますので、0.3%か、そんな、本当に少ない面積なんですよ。ただ、東京だけで考えると、実は36%森林という、これは島も当然入っています。とても多い森林を誇っているというのが、この東京の大きな特徴かなというふうに思います。

これは、檜原村の払沢の滝という観光地があるんですが、そこから撮った檜原村の山の様子です。どうでしょう。これ東京なんですよ。檜原村だけでも93%森林でして、この森林、ただ生えたわけではなくて、戦後、実は、はげ山だった所に地元の人たちが1本1本植えて、このように復活しているという、そういった山でございます。建物がちらっと見えているんですけど、あれは学校ですね。檜原村の小学校です。こういう森の中に溶け込むような、まさに田根さんのプレゼンにあったような、そういった景色があるという場所になります。

そういう東京の森林に対して、都民の人はどういうふうに期待をしているのかなというのが、実はこれ都政モニターアンケートで出ておまして、ちょっと僕、気付くのが遅かったんですけど、実は平成29年、今年更新されています。その中で、それほど大きくは変わらないんですが、都民の方は東京の森林に対して、水質を浄化してほしいとか、二酸化炭素を吸収してほしいとか、そういう環境のためにあってほしいというのがとても多くの方が思っていることで、それに加えて、体験、例えばハイキングをしたいとか、ヨガをしたいとか、森林空間を使って何かプラスになるような体験がしたいというような、そういう方が多いというのがこの結果に表れています。

僕ら林業をやる人間からすると、ちょっと壊滅的なこの結果、3%の方が木材資源として期待をしていると。伸びしろがあると言えば、かなりプラス思考で考えられるのかなと思うんですが、かなり厳しい状況かなと思います。

これは日本学術会議というところでも、森林には多面的機能がありますよということで、

経済資源としての機能は、これ数値化すると6,700億円というふうに言われておまして、この半分が木材資源ですね。その半分はキノコ、意外とキノコも多い。キノコ生産ですね。そういった状況になっております。

それに対して、環境資源としての機能はどれぐらいあるかと言うと、70兆円。これは、例えば先ほどの土砂流出防止機能があってほしい、それを砂防ダムに換算するととか、そういう色々な計算方式があるんですが、それで言うと70兆円にも上る。それだけこの森林というのはとても大きな機能を揃えているというのが、ここでも分かるかなというふうに思います。

そんなところで、私たちはやはり森の恵みをできるだけ享受したいという中で、まず大事なところが、日本の国土を守る環境資源としての生物多様性であったりとか土砂流出防止、水源涵養機能、そういったものを育てるような森にするためには、都知事もよくおっしゃいますけれども、間伐であったりとか、森の手入れというのがどうしても欠かせない。

先ほどお伝えしたように、勝手に生えた木ではないんですね。東京都の半分は人工林です。人の手によって育てられたもの。半分は広葉樹、自然に生えたもの。半分はそのように手入れを続けていかなきゃ、この機能は保たれないという、そういう状況です。

そういった手入れの行き届いた所であれば、色々な体験ができるわけですよ、気持ち良くレクリエーション。くわばたさんが先日、お話しされた時に、お母さんたち子育て大変なんだと言った時に、是非、僕なんかからしたら、森に来て、空気の良い所でちょっとリフレッシュしてもらえるような、そういう素敵な森をつくることができれば、それは環境資源としても機能を果たしますし、体験もできる。

そしてなおかつ、そのようなすばらしい森からは経済資源として良い木材もとれますし、良いキノコもとれて、なおかつ、例えば、最近ジビエなんかもはやっていますけれども、そういった動植物、そういったものもとれる。そういう良い山をつくることが、そういった付加価値を見出すというのが森の特徴かなというふうに思います。

そんな中で、東京の2050年の森というふうに考えるんですね。戦後植えられた木が樹齢100年に近づくわけです。2050年には樹齢100年の森が至る所に出てくるわけですね。そのためには、手入れの行き届いた状態で2050年の100年を迎えるのか、手入れの行き届かない状態で2050年を迎えるのかというのは、とても大きな違いだと思うんですね。

昭和35年には2,000人いた、こういう森林作業をするような人が、今は200人しかいないんです。この200人でそういった森林を維持管理していくことができるのかというのはなか

なか難しいと思います。そのためには人づくりというのは本当に急務だというふうに思っています。

そして、その人の手によって守られているこの東京の自然を、誰でも、まるで本当に美術館や映画館に気が向いたときに行けるような体制に、受け入れ体制を整えるというのは非常に大事なことだと思います。東京の場合は特にそうだと思います。森林がそこにあるだけでももちろん素晴らしいんですが、そこで都民の方が、日々ストレスを抱えて仕事をしている中で、憩えるような、そういった森が身近にあるというのはとても素晴らしいことだと思うんですね。

そのためには、例えばハイキングコース、標識も海外から来た人はなかなか見れなくて右往左往していると思います。例えば、車椅子であったりとか、ベビーカー、そういったものを押してでも入れるような、森林を享受できるような恵みを、そういった施設を、インフラをきちっと整備していくということは非常に大事なことだなというふうに思っています。

これはうちのスタッフの集合写真ですけども、若い人がここの森林にどんどん入って、仕事ができるような環境をどんどんつくって行って、僕らみたいなこういう会社がどんどん増えていけば、どんどん活性化して、山村の活性化というのは後からついてくると思うんですね。そういったことが必要だと思います。

これは奈良の吉野ですね。林業の最大の魅力は、再生産可能な資源をつくっていることなんですね。切っても、また植えればどんどん育ってくれるんです。これは日本の大きな特徴です。これは樹齢150年の森ですけども、人工林って何となく悪いイメージがあると思います。スギなんかもそうですよね。花粉を出すからと。何となく荒れた森がある。でも、下にはこのように素晴らしい広葉樹が、手入れをしてあげれば生えてきて、人が資源として使いながらも、野生動物、そういった生物多様性が維持できるような、素晴らしい森をつくることができるんですね。

これは広葉樹の森です。このように案内標識が出て、ハイキング道がありますけれども、道がどれか分からないですし、これ海外の人が来たら、どっち行けばいいんだろうと。意外と東京の森も迷いやすかったりします。まだまだ受け入れ体制がきちっと整っていないのかなと思います。

きちっと整備がされれば、こういう小さいお子さんでも山に入ることができて、このような植樹体験であったり、木を育てるようなこともできるんですね。でも、なかなかそこ

までの整備が今、行き届いていない。

例えば広葉樹の森も、そこで働く人たちが大勢いれば、このような体験を開催することもできて、子供たちが山の中で安心して遊ぶこともできるわけですね。そういったことのためにはやはり人がどうしても必要ですし、そこですばらしく手入れがされて、体験ができる森で。そこで生産される木材を都内、ちょっとおしゃれなんだけど、ちょっと殺風景かなと、そういった所にもこういった木の物がちょっとあるだけで温もりを感じるような。そういった機会をつくることができるのが東京のすごく良いところだなというふうに思っています。

ちょっと森の話が大分盛り上がってしまいました。今度、川の話に行かせてもらいたいと思います。東京で自然と言えば、森に次いで、やはり川ですね。川と言えば、僕の場合はやはり多摩川が気になる場所なので、今回、多摩川に絞りますけれども、昭和40年代、川には泡が浮いて、公害河川なんていうふうにも言われた多摩川ですけれども、今では、あの四万十川、最後の清流と言われた四万十川に匹敵するほどの水質に戻ってきているというふうに言われています。これは東京都の関係者もそうだと思いますし、この川に関わる人のすごい大きな努力の賜物だと思うんですね。東京にそれだけの川がある。

これが下流に近い中・下流域、多摩川は138キロという全長があるんですが、このうちの50キロ地点から下流に向かって撮っている写真ですね。これ、横田基地の近く、拝島あたりです。それでもこれだけすばらしい自然が残っていて、多摩川は護岸化があまりされていないという日本でも珍しい川なんですね。それが東京にあるというのはとても大きなことなんです。

ただ、残念ながら、河川敷から見た時に、やぶがちょっとあって、何となく立ち入りを制限しているような、そういう景色が見えてしまって、せっかくそれだけすばらしい川があるのに、なかなかアクセスする場所がない。もちろんゼロではないんですが、もっとこの環境を多くの人が享受できるようなインフラを整備する必要があるんじゃないのかなというふうに思っています。

そういった中で、せっかく四万十川に匹敵するぐらいの水質まで来ていますので、ここまで来たら、多摩川を日本一の清流にするというのは2050年に向かって目指してもいいんじゃないのかなというふうに思っています。

都民の方が多摩川の利用が促進できるように、河川敷、色々な制限があると思います。ただ、今、スポーツなんか、そこで昨日も僕は走っていたんですけど、野球をやっている

子、サッカーやっている子、でも、その奥にはやぶがあって、川とはちょっと隔離されている。それは非常にもったいないなと思っているので、そういった所で例えばキャンプ場があったりしてもいいでしょうし、遊歩道も、荒川はとても広い遊歩道なんですけど、多摩川は狭いんです。なので、ちょうど中国人の親子の方がおばあさんを車椅子を押して入っていたんですけど、その車椅子でおばあさんが入ることによって、自転車の通行が妨げられたりとか、人が歩くのも走るのもちょっとままならない。「ごめんなさい、ごめんなさい」みたいになっちゃうわけです。もう少しこういった所がバリアフリー化されて、多くの人がそこで色々な体験ができる、そういったイベントなんかもやってもいいと思いますし、そういった空間に活用できればいいなというふうに思っています。

水質改善についてはかなり進んでいますので、ここから先は大変だと思うんですが、雨天時の雨が降ったときの流入水の対策ですとかもされるというふうに聞いていますし、魚道はせっかく天然のアユが遡ろうとしているんですね。今でもあるんですが、まだまだ足りないというふうに漁業関係者の方からも聞いています。こういったものをもっと拡充してあげれば、天然のアユが、昔、多摩川アユとって、將軍様に献上したと言われるぐらいすばらしいアユが捕れているんですね。そういうアユがまた戻ってくる良いきっかけになるのかなというふうに思っています。

そういうすばらしい自然が実はこの東京にあって、世界の首都東京にあるというのはとても大きなことなのに、それに気付いていない方があまりにも多過ぎるというのは非常にもったいないと思うんですね。そういったことを、1,370万人の都民運動として、自然共生フェスみたいな形で、是非多くの人に知ってもらえるような、体験できるようなことを、都内の多摩川であったり、荒川であったり、森であったり、色々な所で同時に開催して、「東京にはこういうすばらしい森があって、東京はそういうものを大事にしようとしているんだな」というのをアピールできるような、そういった日があってもいいのかなというふうに思っています。

ちょうど、全国育樹祭というのが毎年各地で行われているんですが、先日、香川県で行われていて、知事も行かれたというふうに聞いています。来年、実は東京で初めての全国育樹祭というイベントがあるんですね。そういった所でこのようなイベントが何かできると、良いキックオフになるのではないかなんていうふうに思っております。

最後になりますけれども、2050年の東京の自然ということで、樹齢100年の森があるのは間違いない。そこをどのように迎えるかというのがとても大事で、僕はやはりすばらしい

森であってもらいたいと思いますし、多摩川はきっと日本一の清流になっていると思います。そのすばらしい自然と都民が豊かにつき合っ暮らしているという、そういう絵が僕は見れるのかなというふうに思っています。

そうすれば、おのずと海外からも日本の自然を楽しみたいという人がどんどん来て、自然共生都市モデル、一度壊れてしまった自然でありながらここまで復活して、それと上手に暮らしているという、こういったモデルがもしかしたら海外に輸出できるような産業にまで発展できるのではないのかなというふうに思って、お話を終わりにしたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

【小池知事】 ありがとうございます。お話を聞いているだけで何か気持ちの良い、頭の中がクリアになるような、そんなプレゼンテーションありがとうございました。

それでは引き続き、山から、森から今度は海の方に行きたいと思います。三宅島で実際に漁に出ておられる西田さんです。早速、どうぞお願いいたします。

【西田圭志様】 三宅島漁業協同組合漁業研修生の西田圭志です。50年後もおいしい魚を食べるために、東京の漁業の未来についてお話しします。よろしくお願いします。

私が住んでいる三宅島では、漁業後継者を増やすために漁業研修を行っています。私は東京大学を卒業して、この漁業研修に参加しました。なぜ漁業の世界に入ろうと思ったかというと、自然を相手に仕事ができること、そして努力の結果が漁獲量という数字にあらわれ、収入につながるという点を魅力に感じたからです。

例えば、私が好きなキンメダイ漁について話しますと、キンメダイがたくさん釣れるかどうかは、どの場所で釣るかが重要になります。今は親方の船に乗せてもらって、実際に自分で操船をして漁をしているんですが、潮の流れの変化を予測して、「あそこのポイントが釣れるんじゃないかな」と思って、そのポイントに行って魚群探知機をしてみると、うまくいくと魚群の反応が一杯あります。そこで餌を付けた釣り針を海に入れて、ドーンと重りが海底に着いた瞬間、くんくんとさおに魚の当たりがあると、よっしゃと心の中でガッツポーズをして、そして、リールを巻いて道具を上げてくると、釣り針に全部キンメダイが掛かってきて、ずらっと連なって上がってくるんです。こんなふうに、自分で頑張った結果で魚が捕れると、すごくうれしいし、そういったところが漁業の魅力の1つだと思います。

しかし、この漁業の魅力は、一方で現代の漁業が抱える問題の原因にもなってしまいう可能性があります。それは魚の捕り過ぎという問題です。魚を捕る技術が発達すればするほ

ど、漁獲量は増えていきますが、ある程度の漁獲量を超えると自然の回復力が追い付かず、水産資源が減少してしまうからです。

そこで、今日は「水産物の持続可能性」についてお話しします。2020年に開催される東京オリンピックにおいても、「持続可能性」というテーマが重要視されています。水産物についても持続可能性に配慮した調達基準が設けられています。しかし、近年、クロマグロやウナギの資源量が減り、絶滅危惧種に指定される可能性があるということも皆さん聞いたことがあるのではないのでしょうか。その他の日本の魚の資源状態は持続可能なものと言えるのでしょうか。

それでは、私たちがふだん食べている魚の資源状態がどうなっているか、見てみましょう。これは水産庁が発表した昨年度の日本周辺水域の魚の資源評価です。ここではクロマグロやサンマなどの国際的な資源を除いており、日本国内だけで資源管理ができる魚を示しています。日本の水産資源のうち約半分が低位水準、つまり資源が少ないとされていて、その中には東京都の主要な水産物であるキンメダイも含まれています。マグロやウナギだけでなく、日本の多くの魚が今後食べられなくなってしまうかもしれない状態にあるのです。50年後、100年後もおいしい魚を食べ続けるために、こうした資源状態を回復させるための対策が必要です。

では、水産資源を守るために現在どのような取組が行われているのでしょうか。主に行われているのは「行政による管理」と「漁業者による自主管理」です。

「行政による管理」は、例えば国によるTAC制度と呼ばれるものがあります。TACとは、総漁獲量の上限を設定することで資源を守る制度です。しかし、国によるTAC制度は現在7魚種のみを対象に実施されており、日本の多様な水産物を全てカバーし切れていません。そのため、日本の多くの漁業では漁業者による自主管理で資源管理が行われています。

「漁業者による自主管理」には、例えば資源管理計画というものがあります。資源管理計画とは主に漁業者同士の話し合いにより決められた資源管理の取組です。例えば、東京都のキンメダイ漁では、禁漁期間の設定や体長制限などが行われています。資源管理計画が適切に行われていることは、東京オリンピックの水産物の調達基準にも含まれています。しかし、こういった漁業者による自主的な資源管理の取組だけでは、科学的根拠の薄いものになってしまったり、漁業者のもっと捕りたいという声が大きくなって、適切な資源管理にならなくなってしまうこともあります。

以上のように、現在、「行政による資源管理」と「漁業者による自主管理」が行われているのですが、もちろんその中にはうまく行っている取組も、そうでない取組もあります。しかし、これらの取組は、その成果の情報がオープンになっていないので、消費者や流通業者はそういった情報を基に持続可能な水産物を選択するということができない状態になっています。行政や漁業者だけでなく、商品を選択する消費者も持続可能性に配慮した選択ができれば、より効果的な資源管理をしていくことができると思います。

以上の課題を踏まえて、50年後や100年後もおいしい魚を食べ続けるために、私なりの理想の漁業を考えてみました。まず、資源量や資源動向などの科学的根拠に基づいた資源管理が行われていること。資源管理の取組がどのくらい資源の回復に寄与したかなどが漁業者にフィードバックされ、また、魚の生態に合った効果的な資源管理ができる状態が理想だと思います。

そして、これらの資源状態の情報がよりオープンになっていること、魚売り場でそれぞれの魚の資源状態が示してあれば、消費者がそれを基準に商品を選ぶことで、持続可能な社会に貢献することができます。

また、たくさん捕る漁業から需要に合わせて捕る漁業への転換。魚が捕れるときにただ捕るだけの漁業ではなく、漁業者が科学的根拠を基に、その魚が一番おいしい時期に提供したり、需要に合わせて提供することで、水産資源を最も有効に活用できます。こういった前提があって初めて、科学技術を用いた効率的な操業が適切に行えると思います。

例えば、人工知能を用いた漁場の予測は乱獲を招いてしまう可能性もありますが、漁獲量制限を設けるなど、適切に資源管理が行われていれば、漁場探索時間の減少による経費の削減などが可能です。

以上のような理想の漁業が実現した結果、50年後の東京の漁業がどうなっているか、考えてみました。

水産資源が回復した東京の海には魚がたくさんいます。最初に説明した、いかにたくさん魚を捕るかという漁業の魅力は、いかにおいしい魚を捕るかという魅力に変わっていると思います。漁業の「きつい」、「汚い」、「危険」の「3K」の部分は、機械化されて作業が楽に、漁師の経験と勘は人工知能に代替されることで、若者の新規参入のハードルが下がります。魚の生態の解明や漁具の進化によって、大きくて脂が乗ったおいしい魚だけを選択的に捕ることができるので、市場には今よりももっとおいしい魚が並ぶでしょう。

また、資源状態などの情報がきちんと伝わることで、密猟や産地偽装はなくなり、消費

者は本当に欲しい水産物を選ぶことができます。さらに、持続可能性についての意識が高まることで、今まで利用されてこなかった魚の価値が見直され、みんなが知らなかったおいしい魚が食べられるようになるかもしれません。

こうした理想の漁業の実現のために、そして、東京オリンピックで持続可能な水産物を提供するために、東京ができることを考えてみました。

まず、それぞれの魚の資源状態や漁業者による自主管理の取組を科学的に評価し、その情報を誰でもアクセスできる状態にすること。これによって、消費者はより持続可能な水産物を選択することができ、漁業者はどのような管理方法が適切かを判断することができます。

また、市場の魚のトレーサビリティを向上させることです。トレーサビリティとは、商品の流通経路を遡ったり、追跡したりできるということなのですが、商品の魚の漁獲方法や漁獲海域まで遡ることができれば、同じ魚でもより持続可能性の高い漁獲方法であったり、海域の魚を選択することができます。さらに、トレーサビリティの向上によって、神経締めや血抜きなどの鮮度保持のための方法も分かれば、消費者はよりおいしい魚を選択することができます。そして、トレーサビリティが高ければ、東京オリンピックで提供される水産物の持続可能性に対する説明責任も果たすことができます。

クロマグロやウナギ、サンマのようなよく知られた魚以外にも、資源状態が良好でおいしい魚は一杯います。そういう魚を知らないのはすごくもったいないことだと思うんです。私も島に移住してきて初めて知ったおいしい魚がたくさんあります。足りないのは正しい情報だと思うんです。トレーサビリティが高いということは、こういった魅力的な魚たちがきちんと評価されるということでもあります。魚の資源状態がもっと注目され、トレーサビリティが向上することで、持続可能な水産物が提供できる東京、そして今よりもっとおいしい水産物が食べられる東京になることができると思います。

以上で発表を終わります。ありがとうございました。

【小池知事】 ありがとうございます。

それでは、山と海と今日はセットで青木さんと西田さんからのプレゼンをいただきました。すごいですね。西田さんは泳げるの？

【西田圭志様】 あまり泳げないです。

【小池知事】 もともとご出身はどちら？

【西田圭志様】 出身は広島です。

【小池知事】 で、東大で、もともとは水産を勉強。

【西田圭志様】 そうですね。東大で水産で魚の研究をしていて、漁をする実習があるんですよ、魚を捕る実習が。そこで一杯魚が捕れたのがすごく楽しくて、やってみたいなと思ったのが理由ですね。

【小池知事】 そうですか。すごいですね。

青木さんのご出身は東京ですか。

【青木亮輔様】 生まれは大阪なんですけど、たまたま、西田君じゃないですけど、僕の父親が水産関係の仕事をやっていて、転勤先が大阪だったんですね。なので、港近くで育ったんですけど。でも、中高はこっち来ていますので。

【小池知事】 そうですか。ありがとうございます。

それぞれ山と海の話でございましたが、それじゃ、ここから皆さんの自由な議論に進んでいきたいと思います。今のプレゼンテーションを聞かれて、どのような感想をお持ちになって、そして今後どうしてこの漁業であるとか林業を発展させることができるのか、次の世代までどうやってそれをつなげていくことができるのかなどなど、どうぞご自由に発言をしていただければと思います。いかがでしょうか。

【パッケン（パトリック・ハーラン）様】 お二人、お疲れさまでした。さすが、1か月も空いたからさすがに一杯練りましたね。

青木さんのプレゼンの中で、僕、特に驚いたのは、キノコの経済効果が3,000億円を超えているんですね。あまり東京産のキノコってというイメージはなかったんですけど。

【青木亮輔様】 あ、ごめんなさい、あれは日本全体の。

【パッケン（パトリック・ハーラン）様】 日本全体の。

【青木亮輔様】 はい。あのデータはそうですね。ただ、東京でも同じような、木材とキノコ、林産ですね。

【パッケン（パトリック・ハーラン）様】 それと全くベクトルが違いますけど、2050年のビジョンをなし遂げるためにと言うか、もっとみんなが期待している森林の楽しみ方、みんなが、観光客も住民の皆さんも東京の山にすぐ行けるようになるには、アクセスの改善が必要なんじゃないかなと。

【青木亮輔様】 そうですね。おっしゃるとおりですね。やはりアクセスというのはとても大きな障害になっていまして、僕も檜原村からここまで出てくるときに電車を乗り継いでいかなきゃいけない。

【バックン（パトリック・ハーラン）様】 今日は何時間かけて。

【青木亮輔様】 今日も、村から言うと2時間ぐらいですね。

【バックン（パトリック・ハーラン）様】 2時間かけて。

【青木亮輔様】 車で行けばもちろんもう少しアクセスはいいんです。1時間半ぐらいで行くんですけど、電車だとなかなか難しい。でも、例えば上高地とか、ああいう山の方だと直通バスが出ていたりするんですよ。

【バックン（パトリック・ハーラン）様】 直通ってどこまでですか。新宿までですか。

【青木亮輔様】 そうですね。新宿からそういった上高地とかに直通のバスが出ていたりするんです。

【バックン（パトリック・ハーラン）様】 山へのアクセスを、改善という言い方はちょっと失礼かもしれないですけど、アクセスを増やそう、もう少し山を近くにしようという動きはあるんですか。ご存じの限りでいいんですけど。

【青木亮輔様】 今、JRの方も本数がちょっと少ない。もともと少ないんですけど、少なくなる傾向にあるんですが、ただ、それって、そっちが先と言うより、魅力的な森が出来ることによって、必然的にそこに行く人が増えれば、絶対それはついてくると思うんですよ。なので、まずは東京の森林、2050年には樹齢100年の森が広がるような素敵な森になるわけですね。そこをきちっと人を受け入れるような体制をつくって、みんなが行きたいと思うような森が出来れば、アクセスは多分ついてきてくれるんじゃないのかなと期待していますけどね。

【バックン（パトリック・ハーラン）様】 なるほど。本数を増やすぐらいしかやり方はないんですね。別に新しい森林線をつくろうとかはないんですよ。青木さんに聞いてもしようがないけど。

【青木亮輔様】 そうですね。ただ、近くの最寄りの駅から檜原村ってなると、路線バスで更に入っていかなきゃいけない。それはそれで風情があっていいという捉え方もあるとは思いますが。

【バックン（パトリック・ハーラン）様】 辺りだからこそ良いという。

【青木亮輔様】 そうですね。ただ、先ほども言ったように、小さいお子様がいるようなご家庭だとなかなか、ベビーカーを押して山の中で坂道多いし、というようなところで、ちょっとハードが上がってしまうんじゃないのかなと思うので。

【バックン（パトリック・ハーラン）様】 その辺もアイデア募集中ですかね。

【青木亮輔様】 そうですね。今、セラピーロードとかセラピー基地とか、色々良い環境は整いつつあるので、そこがもう少し、例えばバリアフリー化したりとか、本当に気楽に行けるような仕組みと言うか、そういうインフラを整えてあげるだけでも大分変わってくるかなとは思いますが。

【パクン（パトリック・ハーラン）様】 なるほど。ほかにも一杯言いたいことあるんですけど、小分けにします。

【小池知事】 はい、いかがでしょうか。

【モハメド・オマル・アブディン様】 すいません、遅れてきたのに凶々しく質問をします。

まず青木さんからですけど、東京都のことを考えなきゃいけないのですが、最後に聞いた世界に輸出する林業の技術ですね。僕は特にそれを聞いて、ちょっと故郷に思いを馳せて、砂漠化現象に対して人工林で、要はつくる人たちにとっては商売になると言うか、なりわいとして成り立つということであれば、是非その辺をまた詳しく青木さんと考えていきたいなと思いますけれども、これは商売になるんですか。なっていないければ青木さんここにいないかもしれないけど、なるかどうかということをまず聞きたいです。

【青木亮輔様】 先ほどの海外に輸出するというのは、自然共生モデルというところで、そうやって一度壊れてしまった自然をここまで直してきた。むしろそれが更に素敵な樹齢100年の森に近づいていく。そこに、例えば先ほどのアクセスの問題であったり、人材育成の問題であったり、そういったものを整えていくということがきちっとできたならば、それは海外でも、例えば中国もどんどん伐採が進んだ所を今、一生懸命植林しようとしています。でも、森って、切ってしまったら、また一から植えてやると、10年、20年ではなかなか良い森にはなってくれないんです。そういう長期スパンでやっていく、東京が1つの大きなモデルになると思うんですね。例えば先ほどの多摩川の水質が改善された、森林が豊かになってきた。そういった仕組みを輸出できればいい、そういうふうに思っています。

【モハメド・オマル・アブディン様】 分かりました。ありがとうございます。

もう1つ、西田さんに伺っていいですか。評価されない魚たち、それはすごく私はポイントだと思います。今、よく言われているのは、乱獲がある。ただ、この話を聞いていますと、まだ流通していないけれども、ちゃんとした資源状況が良い、資源管理がちゃんとされている魚がたくさんあるということですが、なぜ、おいしいのに評価されない魚たち

が出てくるのか。それは商売の論理なのか、キンメダイというものは安く捕れて安く出回せるから、流通に関わっている商売……。

【小池知事】 キンメダイは高いよ。

【モハメド・オマル・アブディン様】 高く売れるということですね。評価されないものたちというのは、もしかしたら利益を上げづらいのか、その原因は何だろうか。

【西田圭志様】 例えば、見た目がすごく悪い魚だったりしたら、市場で並んでいる時にその魚の状態で並んでいると、味がおいしくても安く買われていったりすることがあるんですよ。そういう理由で評価されない魚だったり、あとは、定期的に流通しない、めったに捕れない魚とかだと、やっぱり安くなっちゃいますね。

それがおいしいというのがちゃんと情報が伝わっていれば、それもそれなりに評価されるのかもしれないですけど、珍しい魚がポーンと出てきたら、「何だ、このよく分かんない魚は」ってなって、あまり買われないうのがあると思います。

【モハメド・オマル・アブディン様】 じゃ、これはブランド化しなくちゃいけないですね。

【西田圭志様】 そうですね。

【モハメド・オマル・アブディン様】 分かりました。是非、評価されない魚たちを食べに行くツアーでもメンバーで組んで行きたいなと思います。

【小池知事】 見た目が悪いとか見た目が怖いとかであるならば、ナマコを最初に食べた人は、私はすごい偉いと思います。

伊勢谷さん。

【伊勢谷友介様】 ありがとうございます。ご苦労さまです。僕も森とか水産のことは結構調べたりとかして、お二人のお話を聞きながらまた再発見をさせていただいたという感じだったんですね。

今、森林の方のお話の時に、経済資源としての機能が6,700億円であり、でも、そうじゃなくて環境資源としての機能が70兆円であるという、このポイントが大問題だと。つまり、人間が森林の機能を人間の社会に対してすごくポジティブに使うことができていないのがこれぐらいで、これを人間社会は基本的に無視しようとするのが今の資本主義社会だから、そうすると、ここのことを維持していかなくちゃいけないのが、民間企業がずっと頑張ったところで、僕、無理だと思っているんですよ。

そうすると、誰がやらなきゃいけないのかなと思ったときに、おそらく我々人類、一人

一人も含めてなんですけど、私たちの未来として守らなきゃいけないものとして、お金を稼ぐ対象のものとして森林資源を考えていちゃ、多分がちが明かないのは当たり前だと僕は思っているんです。

そうすると、どういうふうに変えられるのかなって考えたときに、今の政治状態を考えてみると、どうしても政党さんが自分たちのやり方だけをとっていくというふうにやっていったときに、政党さんは誰の票をとっていくかと言うと、一般の人たちなんですよね。じゃ、一般の人たちがその政党の、しかも今、政党にくくりと言うか、党議拘束もなくなってきている上で、いよいよ政党政治の意味も分からなくなってきていて、ここを外してあげるといって、ちょっと話が飛びましたが、根本的な政党政治をやめることによって、やっとな民間が、自分たちが何が問題なのかというのをはっきり分かって、投票するべきところに投票できるということにつながる。

結果的に何につながっていると、自然環境、森に対しての環境に対して理解することによって、我々がとらなきゃいけない行動の指針みたいなものもやっとな見えるはずなんです。そうしないと、おそらくこの民主主義は変わらないはずなんですけど、変わらない理由が僕は政治システムの中にも1つあると思いつつ、もう1つは、おっしゃったとおり、民間の人がそれを理解できる状況まで今、至っているところではないというのがこの問題のかなと。

おそらく海の問題もほぼ同じと言うか、ちょっと違うのは、少し似ているのはあれですね、シカとかイノシシ、今、めちゃくちゃ増えているけど、僕らも食べていないんですよ。さっきアブディンさんが、雑魚みたいなお魚って値段が付かないのって、量も捕れなければ、誰も知らなかったりもするし、だけど、また今最近、山の方で、何ですか、あれ。

【青木亮輔様】 ジビエですか。

【伊勢谷友介様】 ジビエがやってきたから、そっちの方で、ちょっと変なお魚さんも一緒に食べられるお店があったら、僕はお魚大好きなので、行ってみたいというふうに思いましたね。

なので、あとは、僕は意外と西田さんが結構コアなことを突いていらっしゃるのではないのかなと。つまり、本当はもっとできることが行政の方にあるんじゃないのかなということだと僕は思うんですよね。漁獲量をきちんとコントロールして、それが正しい、何が悪いとかということ、それも含めて。それも実は消費者がまだ理解ができていないんですよ。何の魚が一杯いて、何がもう足りなくなっていて、いつの間にか深海魚の、ブリジ

ゃなくて、ギンムツ食べていたら、あれ、メロって魚に変わっているわけですよね。いや、びっくり。知っていました？ メロって魚。みんなギンムツだと思っているのはメロですからね。

【高橋みなみ様】 メロですか。

【伊勢谷友介様】 そう。とにかくそんな感じなんですよ。今、民間が漁業に対してどれぐらい理解しているかと言うと、全然知らない物を食わされていても何も気にしていない。ということは何が問題かと言うと、問題が分かっていないんですね、消費者は。だとしたら、消費者は絶対選択できません。

でも、選択できない状況にしているのって何なんだろうと言うと、問題を露呈できない日本の環境だと僕は思うし、日本人がちゃんと自分たちが未来をこうしたい、だったらこの選択をする必要があるって、そこの責任感をとらないと、おそらく今、森とか海だったり、これから資源になって、お金になっていかない部分を守るというふうな、人類が初めてとろうとしている方向性は難しいなというのが僕の思いであります。ちょっと話し過ぎましたが、僕の思いです。ありがとうございます。

【小池知事】 みなみさん。

【高橋みなみ様】 本当に伊勢谷さんのお話を聞いていても思ったんですけど、あまりに知らな過ぎるなというふうに思いました。私もやっぱりお魚も山でとれるものも大好きですけど、どういう状況下にあるかって全く知らないの、ウナギだったり、マグロが大変なことになっているということも、別に誰も教えてくれない状況もあるなと思いつつも、自然の回復力にずっとずっと頼り続けてきてしまった部分があるのかなと思いつつも、先ほども檜原村がまさか人工林と言うか、植えてあんなにすばらしい山が出来たんだということも知らなかったの、そういう部分をもっと我々が知っていく必要があると思いつつも、例えば東京の半分が人工林というお話も知らなかったんです。

そこに自然と共生するというところで、人の力がすごく必要だというふうに思ったんです。ただ、その状況を知らないから人が増えないと言うか、2,000人いたものが200人になってしまったとか、そうなると、やっぱり減っていってしまう一方なのかなという。今、お話があった自然共生フェスなどは、1回のフェスだけじゃやっぱり難しいですから、もっともっと我々一般の人たちが大変なことになっているんだということだったり、自然と共生していく、キャンプや、海もそうですけどもっと面白いことがここにあるんだと、何かもうちょっと我々が興味を持たなきゃいけない段階にあるんだなという危機感が湧いてき

てしまったのがちょっと恥ずかしい部分ではあるんですけど、それはすごく思いました。

【小池知事】 いかがでしょうか。くわばたさん。

【くわばたりえ様】 ありがとうございます。

まず森林のことなんですけど、私、子供が今3人いてるんですけど、この前、しながわ水族館に行って、帰りに近くに公園があるから行こうと思ったら、全面工事やったから、「くそ」と思ったんですけど、逆に、横にちっちゃい小川が流れていて、そこで子供を遊ばせたんですよ、すごい暖かい日だったんで。そうしたら、公園にいるよりもすごい楽しそうに、いつもだったらブロックで遊んでいるのをドングリで遊んだり、ドングリを水の中に投げて遊んだりしているのを見て、「あっ、こういう所でもっと遊ばせたいな」と思ったので、だから、森の所に行けたりするというのがすごくありがたいんですけど、ただ、2時間かかるのはとてもじゃないけど、連れていけない。

往復4時間は難しいから、もしあるとしたら、ほんまに泊まりで宿泊施設をつくってほしいし、あと、逆に言うと、都内に森もどきじゃないけど、何かちょっとした森、広い公園、代々木公園みたいな芝生わーっていう所はあるんですけど、木が一杯あって、落ち葉があって。私、子供に木登りをさせたいなと思っているんですけど、今、子供が、誰かが木登りしていると、「ママ怒って」って言うんですよ。だから、木を登ったら駄目とか、例えば信号待ちしている所にビワの木があるんですけど、「ビワ食べたい」って言うけど、「食べたら怒られるんちゃうのかな」って。いや、昔やったら、とって食べたりしていたのに、何か、もう腐ってカラスが突ついて食べているんですよ。いや、これを子供に食べさせたかったなとか思ったり、自然になっているものとかを食べる機会と言うか。

スウェーデンには森の保育園というのがあって、そこは保育園がないんですよ。森が保育園で、みんなでお弁当を広げて食べたり、3時のおやつは野イチゴをとって食べたりするというのがあって、ちっちゃい時にそういう経験をさせたいなと思うので、だから、森もどきみたいなのを都内、言ったら、自分の自宅から30分で行きたいですよ、ぶっちゃけ。1時間子供を連れていくのはなかなか難しいので。自分の家からですけどね。

そういうのがあってほしいなと思うのと、あと、お魚のことなんですけど、これからおいしい質のいい魚が捕れるようになるって言っていたんですけど、この前、番組に出させていただいた時に、今もう魚食べない子供が多いというテーマでやっていて、何でかと言うと、お母さんが魚を焼かないんですよ、コンロが汚れるのが嫌という理由で。だから、どんだけおいしい魚が捕れても結局、お母さんが焼きへんかったら誰が食べんのやという

話になるので、だから、もっと、お魚って体にいいんだよみたいなのか、分かってんねんけど、何か、私は楽やから好きなんですよ。お魚、焼くだけで終わるから。でも、ママとかによっては、1回コンロをガチャガチャ出して洗うの嫌やと言う人が多いから、何かそういう、もっとお魚を食べる環境というのも考えていかないと駄目なんじゃないかなというふうに思いました。ありがとうございます。

【伊勢谷友介様】 かまぼこは色々あるもんね。じゃこ天とか。

【小池知事】 とてもリアルな話でしたね。コンロが汚れるとか、すごい生活密着。

菊地さん。

【菊地裕介様】 いつもこの懇談会に来ると、自分の知らなかったことに出会えるので、そのことをすごく感謝しているんですけども、知らないか、知っているかという違いってものすごく大きなことだと思うんですね。知らないから、例えば、雑魚と言われているような魚は食べないわけだし、価値が付かないわけですけども、そういったものにもすごく魅力があって、資源としての可能性があるみたいな話を、西田さんのお話を伺っていて考えました。

あと、青木さんがおっしゃっていたお話から、やっぱり木というのは我々音楽家としてはすごく興味があって、楽器を、どんな材質でつくっているのかというのを調べたら、それは東京でつくっている木とはちょっと違うみたいなんですけれども、ただ、奏でる空間、要するに音楽ホールなんていうのは、やっぱり木でつくった空間というのはすごく独特の響きがして、僕なんかはすごく好きなんですけれども。そうすると、そういった木材を使って、そういった空間をつくって、そこにライフスタイルとして、そこで昼間は森を探索して、夜はそういう所で音楽を聴いてとか、そういうふうな複合的なものをつくっていければ、これは観光資源としてとても魅力的なものになるんじゃないかなというようなことを感じていました。

確かに、行きづらいですよ。同じようなことを例えば長野県とかですと、新幹線で軽井沢なんか行けて、ホールがあって、滞在して、昼間は森を歩いて、その後、音楽会を聴いてなんていうのは割と定着しているわけですけども、でも、本当は東京の方が、檜原村の方が絶対近いわけだから、これはもったいない状態にあるのは確かだと思うんですね。

アクセスの問題、僕、結構鉄道オタクなので、中央線が多摩の動脈として走っているわけですけども、近い将来、グリーン車が導入される。そうすると、ちょっとゆったり向

かうことができるようになる。これは第1段階で、更に特別列車を走らせるとか、バスとの接続を良くするとか、これはアクセスの改善は色々可能性が僕はあると思っています。それは、たくさん利用者がいる時だと、なかなか逆にできないことで、今、減ってきてしまっているからこそ、てこ入れがやっとなることができるようになってきたという側面もあるので、これはもしかしてすごく将来可能性があるのかなというふうに聞いていました。

ちょっと話が戻るんですけども、今日、落合さんはいらっしゃらないのですが、よく「20世紀はどうで、21世紀はどうだ」というような難しいことをおっしゃっていましたが、20世紀ってやっぱり規格化してきた時代だと思うんですね。だから、魚は魚、木は木みたいな、どんどんそういうふうにシンプルにしちゃって、木って分かりやすいものを大量生産する。これは21世紀では、知事もよくおっしゃっていますけど、多様性の時代になると思うんです。ただ、多様性ってすごく難しいんですよ。知識がないと、なかなかついていけないことだと思うんです。だから、魚の問題もそうだし、我々がやっている音楽にしたって、どんな文化の下で、どんな人のどんな人生でこれは出来た曲なのかみたいなことを知っていて楽しめるものと、知らないで何となくきれいな曲だなと言って聞いているので、全然これ違うんですよ。だから、知識のあるなしによって、楽しみ方というのはとても深さは変わってきちゃうんですけども、ただ、この知識の問題、これはもしかしてAIが解決していけるのかなというようなことを僕は感じています。

落合さんが眼鏡で色々情報が見えるようになるということをおっしゃったじゃないですか。例えば、これはどこから来たものでなんていうのも全部AIが教えてくれるようになれば、そういったものを楽しめるようになると思いますし、多様性を大事にするようになるし、そうなれば、僕はお金になると思うんですよ。

やっぱり何だかんだ言っても資本主義なので、お金にならないものにモチベーションを働かせるというのはすごく難しいと思うんですけども、僕はそういったことでアイデンティティ、トレーサビリティもそうですけど、それが何であるかを知ることから、今、お二人のお話、これは未来につながっていく可能性、僕なりにあるかなと。自分のやっている文化、趣味の領域ですよ。趣味というのは普通の人気が気にも留めていないようなことにこだわるのが趣味なので、それで飯を食っている人間なので、ちょっとそんなことを考えながら聞いておりました。ありがとうございます。

【小池知事】 ありがとうございます。コメントを……宿輪さん。

【宿輪理紗様】 お二人、お話ありがとうございました。

私は自然が好きで、中高の時に友達と放課後、土手を回るメンバーというのがいまして、江戸川の土手と言うか、河川敷だったり、多摩川の河川敷だったり、荒川の河川敷に突発的に行って、レジャーシートがないときはそこら辺で持ってきたチラシなんかを敷きながら、お弁当を食べたりなんかもよくしていました。

先日、9月に奥多摩に、すみません、檜原村じゃないんですけれども、奥多摩に伺いまして、おそばを食べた後に、湖、奥多摩湖を見た後、温泉に入って、日帰りなんですけれども、帰って参りました。

その翌月、箱根に行ったんですね。箱根は1泊で行きました。と言うのも、先ほどくわばたさんもおっしゃっていたんですが、宿泊施設、温泉にセットで旅館が付いていたりだとか、そこでおいしいご飯が出たりだとかというものがあつたということと、あと、移動距離ですね、時間がかかるので、わざわざその日に戻ってくる必要もないかなということで、箱根は1泊したんです。

奥多摩にも1泊できる施設だったり、滞在時間を長くするような仕組みと言うか、もっと楽しめるものがあれば、より来てくれた方もお金を落としていってくれるし、そのお金ももっと木に生かせたりとか、そういうふうによく回っていくのかなというのは感じたところです。

箱根と奥多摩とかを比べて、そんなに特段、あまり大きな差はないと思ったんですね。なので、箱根のような温泉施設と言うか、癒しを求める場として奥多摩や檜原村もなっていけると思うので、そこら辺を何か考えていけたらいいなというふうには感じました。

ありがとうございます。

【小池知事】 ありがとうございます。東京都では最近、グランピングという。

【伊勢谷友介様】 ゴージャスなキャンプみたい。快適な。

【小池知事】 ゴージャスなキャンプみたい、そういうのも展開しようとしておりますので、ちょうどあの地域、合うんじゃないかしらね。

【青木亮輔様】 そうですね。今、奥多摩でもそういうグランピングの施設をつくっているそうですね。

【小池知事】 ご意見いかがでしょうか。メイミさん。

【メイミ様】 メイミです。お二人のプレゼン、楽しく聞かせていただきました。

まさに今、グランピングというお話出てきましたけど、私も自然が大好きで、よく森に行きたいなと思って、休みの日に自然がある所に、よくと言うことでもないですけど、年

に1回ぐらい行くんですけれども、よく考えてみると、東京じゃない所に行っているなどということを思いまして、それこそ自然に触れ合いたいののでグランピング施設に行ったりするんですね。富士山の方に行ったりだとか。

最近、檜原村にもグランピングの施設があるのを発見して、ちょっと行きたいなと思っているんですけれども、そこは1日1組限定で、ややお高くてみたいな感じなので、あと、これから出産の予定もあるので、子連れで行けるのかなとか、そんなことを思ったり。色々調べてはみるんですけど、まだそんなに施設もなかったりというようなこともあって、行ける施設が多くなるといいかなと思っています。

グランピング施設に行った際に、去年かな、うちの義理の両親を連れて3人で行ったんですけれども、トイレが例えばウォシュレットがあったりだとか、森の中だけど暖房があったりだとか、冬場だったので、色々快適に過ごせるけれども、山なので、階段がしんどくて、これもう来年、再来年になってくると、両親は厳しいのかなということを思ったりしました。そこら辺はバリアフリーだとか、年配の方にとっても自然ってすごく良い環境だと思うんですけれども、やっぱりちょっと厳しい面もあると思うので、年配の方でも気軽に行けるようなバリアフリー化がされるといいかなということを思いました。

あとは、子供がいたんですけれども、子供が自然の中でずっとゲームをやっているという光景を見まして、それが駄目とかではなく、きっと今後そういう、ゲームが好きな子は多いので、ある意味、逆手に取って、自然の中で何かバーチャルなものと自然が融合するような遊びができてもいいのかなということも思いました。

そして、お魚の方なんですけれども、これは何かテレビの番組で見たような気がするんですけど、あるスーパーが漁業組合さんと提携して、すごく人気のスーパーなんですけれども、タイムセールでお魚を出すんですが、それが珍しい知らない魚をバーツと出して、すごく人気だというのをやっていて、見たことないからみんな調理どうしたらいいか分からないので、その場でおすしの職人さんが握りをつくったりだとか、さばいてくれたりだとか、調理しやすいような状態だとか、あと調理したものにかえてくれたりというので、こういう食べ方したらおいしいですよというようなことをやっているスーパーですごく人気だということを見まして、やり方1つで知らない魚ももっと知っていただける方法があるのかなということも思いました。以上です。

【小池知事】 ありがとうございます。自然の森に行っても子供はゲームしているというのは、せっかく海外に行っても日本人だけでカラオケしているみたいな、何か共通するよ

うなところもありますけれど。

さあ、ティナさん。

【山科ティナ様】 ありがとうございます。

まず、青木さんの方なんですけれども、以前ちょうど自分の大学で川を調べるという取組があって、その中で自分はちょっとリサーチをさせていただいたんですけど、利用者と言うか、川に行く頻度が一番少ないのが、10代後半から20代の女性が特に少なかったんですけれども、自分もまさにそういう実感はあって、それは交通だったり、整備の面もあるんですけど、結構、服装とかも困ってしまうなというのが自分の実感としてあって、若者とかに対しては、ファッションと自然の取組もあつたら、ちょっと面白いのかなと。

例えば、みんなで調べに行ったんです、多摩川に。実際に行ったら、みんな入りたくなって、入ろうとするんですけど、どうしても服が濡れてしまうので。それで入って、本当に帰り濡れて風邪引いてしまう人もいたんですけど、でも、現代の技術だったら、入っても帰りにはもう乾いているような生地でイケてるウェアが出来たりとかしたら、新しい楽しみ方が増えるんじゃないかなと思いました。

【小池知事】 ありがとうございます。浜田さん、何か一言。

【浜田愛音様】 お二方、プレゼンテーションありがとうございます。

私は先日、外国人の友人とランチをしたんですね、新宿だったんですけども。その時にその友人から、「東京ってイコール自然っていうイメージがなくて、もったいないよね」って言われたんですね。

確かになって思っ、その後、じゃ何しようっていったら、映画だったりとか、色々あるんですけども、これ、自然と触れ合うというのがあまりなくて、例えば、その子はフランス人の子だったんですけども、パリとかだったら、そこら中に公園があって、結構自然と触れ合うことが簡単で、確かにというのがあったので、私としては「東京イコール自然」というイメージを定着させたいなというのがありまして。そのために私が提案できるのは、例えば、中野区だったら中野区だったり、新宿区だったら新宿という所で、区域で分けて、小さい公園と言うか、アミューズメントパークみたいな森をつくって、若者が森林とか森になじめるような場所をつくれたらなと思っていて。ちょっとした一息つくための公園だったりとかを設けることで、それこそ若者が森に行かない問題だったりとかも、そこで一度触れ合うことで、じゃ行ってみようかなという勇気もつくと思うので、そういう小さな場所を設けることで、そういう問題も解決していけるのかなと思っています。

また、そういうのを行政が整備することで、また、そういう設備を安く提供できるのかなと思っていて、例えば、眼鏡だったりとかを装着してバーチャルにしてというのをやっ
ていくことで、高校生とかお小遣いがそんなにないので、持っている少ないお金で利用で
きる場所があればなと思っております。

【小池知事】 何か。

【青木亮輔様】 まさに今おっしゃったこともそうですし、先ほどのくわばたさんのお
話もそうなんですけど、いきなり森ってすごくハードルが高いんですね。いくらそこに100
年のすばらしい森があっても、確かにハードルが高いので、でも、例えば川は身近に絶対
あると思うんですよね。先ほど川は色々行かれているとのことでしたけど、その川が1つ
の大きなきっかけになればいいなというふうに思っていて、川と森はつながっていま
すし、川と海もつながっているという意味では、川ってすごく、都内をずっと流れている
じゃないですか。そこが色々な都民の人が気楽に行けるような場所になって、そこで、あ
あ、東京にこんなきれいな川があるんだ、すばらしいな、気持ちいいなというふうに思っ
て、じゃ次のステップとして、もうちょっと上流どうなっているんだろうとか、そういっ
た所に少しずつ関心を持っていただくためには、やはりおっしゃるように、まずは都内の
身近な所を環境整備するというのはとても有意義だと思いますし、確かに行政としてそう
いったことをやってもらえると、僕は自然の持っている享受できる恵みというのは、伊勢
谷さんも言っていましたけど、一民間企業でどうのこうのという次元ではないとやはり思
っていて、そこはこれだけ都民の方が期待をしているわけですよ。森林に対しても、環
境のためにきちっと整備してほしいとか、体験できるような場所であってほしいと思っ
ているのであれば、やはりこれは東京都として是非すばらしいものに、アクセスも含めて、
していければいいなとは思っています。

【小池知事】 ありがとうございます。もう時間も迫ってきましたんですが、治山・治水と
いうのは一番基本中の基本で、そして治山がうまくできていないと、それこそ川に、川ど
ころか、あちこちが洪水になってしまうというようなことがありますので、これからどう
やって森を守っていくかというのは私たちの安全を守ることだと思えます。

是非、お誕生日に1本木を植えるとかね、何か色々な運動があるので、1本木を切ると
ときには1本植えていくとかね、何かそういうムーブメントが出来れば、一度、自分が植え
た木をまた見に行くとか、成長を確認するとか、色々なやり方があると思えます。

それにしても、今、社員って何人おられるの？

【青木亮輔様】 今、14名です。

【小池知事】 すごい。みんな食べていけるわけね。

【青木亮輔様】 おかげさまで何とか、はい。

【小池知事】 すごいじゃないですか。こうやって、木こりで食べていけるというのが分かれば、また次の人が来ると思うし。どうでしょうかね。

【青木亮輔様】 そうですね。本当におっしゃるとおりで、うちの会社、先ほど出身を聞かれましたけど、檜原村出身って1人もいないんですよ。都内もそうですし、関西から来ている子もいるし、今は地元の人ってやっぱり若い子が少ないので、でも、街にいるからこそ山の良さとか自然の良さが分かって、そこで働きたいと言う人は結構多いんですよ。

そういった人がどんどん増えて、今度は地元の人が、ああ、何だ、林業ってそんな素敵な仕事なんだとか、自然の中で働けるんだとか、何かそういうふうにつながっていくと、地域も活性化してきますし、先ほどの例えば林業が盛り上がれば地域が盛り上がって、じゃ、若い人がどんどん入ってきて、宿泊施設、もしかしたら民泊なんていうのにつながるかもしれないですし、グランピングとかやってみよう、色々なやってみようというチャレンジが増えると思うんですよ。やはりそこに若い人がどんどん入っていくというのはとても大事だなと思っています。

【小池知事】 それから、海の方ですけれども、このところ北朝鮮と思われる船が流れ着いて、みんな漁師兼兵士だったりするわけですから、そうやって、また北方領土の辺も随分、中国とか韓国とか北朝鮮もそうだけれども、魚をごそっと捕っていっちゃうという。と言うことは、持続可能性について、これは海は全部つながっているんで、どうやって国際的な基準と言うか、約束ルールを守っていけるかというのを徹底しないと、一生懸命日本だけ守っていても、おいしいところは全部持って行かれてしまっただけでは意味がないと思うんですよ。是非、西田さんにはそういう現場を踏まえて、世界にもそういう声を発信してほしいなと思っています。

それから、漁師になる若者がどんどん減っていると言うんですけれども、どうですか、漁師はこれだけ面白いぞというのを皆さんに。

【西田圭志様】 漁師の仕事自体は面白くて、漁師になりたいと言う人は結構いると思うんですけど、やっぱり障壁になるのが収入の少なさと、あとは見通しの効かなさがあると思うので、持続可能な漁業になっていくことで、どんどん若者も増えていくようになる

んじゃないかなと思います。

【小池知事】 ありがとうございます。パックンさん。

【パックン（パトリック・ハーラン）様】 ありがとうございます。皆様のご意見を聞いた後、色々考えていて、小分けしていたんですけど、最後に思ったのは、2050年、33年後のこと、世の中を考えると、木こりじゃなくても森に暮らせるんじゃないかなと思うんですね。

AI革命が続いて、働き方改革が進んで、2人で3人分の仕事ができる、1人で2人分の仕事ができるようになって、下手したら年中働かなくてもいい世の中になっているかもしれないです。そうすると、半年、森の中で暮らしていいんじゃないかなと思うんですね。でも、東京の都民分の住宅を森の中につくると、それは環境破壊にもなります。島にもつくりましょう。海岸にもつくりましょう。そして、ローテーション制で暮らしに行こう。みんな2つの住宅を持つ必要はない。住んでいる時だけ、今、シェアリングエコノミーも進んでいまして、マイカーとか持たなくなるんじゃないかと。みんな共有で色々な車を使うように、共有で森の住宅、海岸沿いの住宅、島の住宅を使って、テレワークでインターネットを通してVRで会社に出勤してもいいし、子供だって1人、自分に向けた教育をどこにいても受けられるような世の中になってくるはずです。

森、島、都内とか中心部というふうに分けて考えずに、生活は全てわたるようにできる日が来るんじゃないかなと、みんなの意見を考えて、もう少し先にそういうことが見えてくるんじゃないかなと今日思いました。以上です。

【青木亮輔様】 いや、本当におっしゃるとおりで、森って色々な可能性があって、僕が今言ったのって何かいかにも森っぽい話なんですけれども、そうじゃなくて、色々な可能性が本当にあると思っていて、それって捉え方、その人がどういう生活で、どういう仕事をやっているか、そういうものによって、森との関わり方。僕はさっきみたいなゲームやっていたっていいと思うんです。それは、その人がその空間でゲームやるのが気持ちがいいからゲームやって、本を読んでいるのと変わらないと思うんですね。音楽を聴いてもいいですし、スポーツをやってもいい。

そういう意味では、森との関わり方ってそれぞれなので、それこそ先ほどのフェスのような自然共生フェスみたいな所で、僕はこういうふうに関わるんだよ、私はこういう感じというふうに色々な多様性があっても、それはすごく広がりがあって、新しい東京ならではの森との付き合い方というのが提案できたら面白いんじゃないかなと思いました。

【小池知事】 ありがとうございます。

この間、御蔵島はイルカですよね、あそこは今、I ターンの若い夫婦が住むというので、そして、子供が生まれたりすると、すごい出生率が一気に高くなるという、数字的に、非常に面白い流れが今出来つつある。テレワークですよね、結局は。

そういう形でこれから島も新しい人たちを受け入れたり、森もそうだと思いますが、おっしゃるように、2050年というのは、それを想像すると、今とは全く違う価値観、全く違うツールが存在するんだろうと思います。であるならば、どうあったらいいかな、どんな生活したいかなという夢を、もう一度、改めて、こんな東京に住んでみたい、こんな生活をしてみたいとのをまた次回も引き続きみんなで模索していきたいというふうに思っております。

ちょうど時間となりました。今日は西田さん、そして青木さん、プレゼンテーションありがとうございました。皆さんもご協力ありがとうございました。

【事務局】 それでは、事務連絡も兼ねまして、前回、この懇談会のアウトプットについてご説明しましたけれども、引き続きの案について説明をさせていただきたいと思いません。

前回の懇談会では、2050年頃の東京、日本の未来像の一端を懇談会のトピックとして、この年度末を目途に出してみたいかという案をご説明いたしました。今回、それを受けまして、アウトプットの構成イメージという形で整理をいたしましたので、資料の真ん中、2のメインパートという部分をご覧いただければと思います。

懇談会のメンバーお一人お一人に東京の未来像を描いていただきまして、これを持ち寄って世の中に出していくという案でございます。描き方につきましては、原稿を一から書き起こしていただく形もございますし、ご多忙で執筆にお時間が取れない方につきましては、インタビューさせていただきまして、これを文字に起こしていくやり方もあろうかというふうに考えてございます。また、文章に限らず、漫画でございませうとか、別の表現による方法もあるのではないかとこのように考えてございます。

アウトプットの具体的な展開方法や作成形態につきましては、引き続き検討をして参りたいというふうに思っております。また別途、メンバーの皆様にはご相談を申し上げたいと思いません。

説明は以上でございます。

【岩瀬次長】 ありがとうございました。本日本日の事項は以上でございます。知事、

よろしゅうございますでしょうか。

【小池知事】 はい、結構です。

【岩瀬次長】 はい。それでは、以上をもちまして、第6回東京未来ビジョン懇談会を終了とさせていただきます。

次回は1月下旬頃の開催を予定してございます。本日は誠にありがとうございました。

— 了 —